

2 麦 類

(1) 要 旨

ア 作付面積

平成30年産4麦（小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦）の子実用作付面積は27万2,900haで、前年産並みとなった。

このうち、北海道は12万3,100ha、都府県は14万9,800haで、それぞれ前年産並みとなった（表2-1、図2-1）。

イ 収穫量

平成30年産4麦の子実用収穫量は93万9,600tで、前年産に比べ15万2,400t（14%）減少した。

これは、小麦及び六条大麦の10a当たり収量が前年産を下回ったためである（表2-1、図2-1）。

図2-1 4麦（子実用）の作付面積及び収穫量の推移（全国）

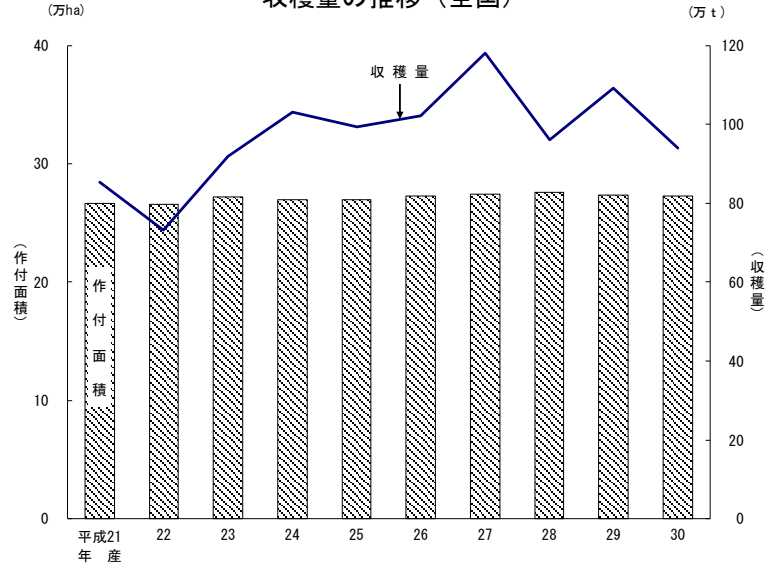


表2-1 平成30年産4麦（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量	収 穫 量		10a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10a 当 たり 平 均 収 量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比	%	kg	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
全 国											
4 麦 計	272,900	...	939,600	△ 800	100	nc	△ 152,400	86	nc	...	
小 麦	211,900	361	764,900	△ 400	100	85	△ 141,800	84	90	399	
二条大麦	38,300	318	121,700	0	100	102	2,000	102	106	301	
六条大麦	17,300	225	39,000	△ 800	96	78	△ 13,400	74	79	285	
はだか麦	5,420	258	14,000	450	109	101	1,300	110	102	252	
北 海 道											
4 麦 計	123,100	...	476,800	△ 300	100	nc	△ 136,700	78	nc	...	
小 麦	121,400	388	471,100	△ 200	100	78	△ 136,500	78	84	460	
二条大麦	1,660	334	5,540	△ 60	97	99	△ 260	96	98	340	
六条大麦	x	x	x	x	x	x	x	x	x	...	
はだか麦	64	172	110	29	183	46	△ 20	85	50	344	
都 府 県											
4 麦 計	149,800	...	462,800	△ 600	100	nc	△ 15,400	97	nc	...	
小 麦	90,500	325	293,800	△ 200	100	98	△ 5,300	98	105	309	
二条大麦	36,600	317	116,100	0	100	102	2,200	102	106	299	
六条大麦	17,300	225	39,000	△ 800	96	78	△ 13,400	74	79	285	
はだか麦	5,350	260	13,900	410	108	103	1,400	111	103	252	

注：1 「(参考) 10a 当たり平均収量対比」とは、10a 当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する当年産の10a 当たり収量の比率である（以下各統計表において同じ。）。

2 全国農業地域別（以下「地域別」という。）の10a 当たり平均収量は、各都府県の10a 当たり平均収量に当年産の作付面積を乗じて求めた平均収穫量を地域別に積み上げ、当年産の地域別作付面積で除して算出している。

表 2-2 平成 30 年産 4 麦（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全農地	4 麦 計		小 麦				二 条 大 麦				六 条 大 麦				は だ か 麦			
	作 付 面積	収 穫 量	作 付 面積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 収 対 均 量 比	作 付 面積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 収 対 均 量 比	作 付 面積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 収 対 均 量 比	作 付 面積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 収 対 均 量 比
国 業 域	ha	t	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%
全 国	272,900	939,600	211,900	361	764,900	90	38,300	318	121,700	106	17,300	225	39,000	79	5,420	258	14,000	102
北 海 道	123,100	476,800	121,400	388	471,100	84	1,660	334	5,540	98	x	x	x	x	64	172	110	50
都 府 県	149,800	462,800	90,500	325	293,800	105	36,600	317	116,100	106	17,300	225	39,000	79	5,350	260	13,900	103
東 北	7,870	16,100	6,570	192	12,600	90	5	160	8	114	1,280	266	3,400	102	10	120	12	nc
北 陸	9,790	18,300	403	170	685	84	7	86	6	50	9,380	188	17,600	64	x	225	x	nc
関 東・東 山	38,500	130,500	20,900	355	74,200	98	12,500	336	42,000	95	4,810	287	13,800	100	x	266	x	nc
東 海	16,300	54,500	15,500	341	52,800	107	3	200	5	168	693	237	1,640	94	44	320	141	190
近 畿	10,400	26,200	9,040	257	23,200	104	153	231	353	97	1,070	221	2,360	84	x	230	x	106
中 国	5,830	16,200	2,410	282	6,800	108	2,740	301	8,240	94	x	171	x	93	x	170	x	105
四 国	4,840	14,200	2,170	317	6,880	100	x	226	x	72	x	x	x	nc	2,640	274	7,230	101
九 州	56,300	186,800	33,400	349	116,600	115	21,100	310	65,500	115	3	387	13	129	1,750	271	4,740	115
沖 縄	x	x	29	155	45	89	x	x	x	nc	-	-	-	nc	-	-	-	nc

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

小麦の作付面積は 21 万 1,900ha で、前年産並みとなった。

このうち、北海道は 12 万 1,400ha、都府県は 9 万 500ha で、それぞれ前年産並みとなった（表 2-1、2-2、図 2-2）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は 361 kg で、前年産を 15% 下回った。

このうち、北海道は 388 kg で、前年産を 22% 下回った。

また、都府県は 325 kg で、前年産を 2% 下回った。

その主な要因は、北海道の秋まき小麦が 6 月中旬から 7 月中旬にかけての低温、日照不足の影響により登熟不良となったことである（表 2-1、2-2、図 2-2、2-3、2-4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は 76 万 4,900 t で、前年産に比べ 14 万 1,800 t（16%）減少した。

このうち、北海道の収穫量は 47 万 1,100 t で、前年産に比べ 13 万 6,500 t（22%）減少した。

また、都府県の収穫量は 29 万 3,800 t で、前年産に比べ 5,300 t（2%）減少した（表 2-1、2-2、図 2-2）。

図 2-2 小麦の作付面積及び収量及び 10 a 当たり収量の推移（全国）

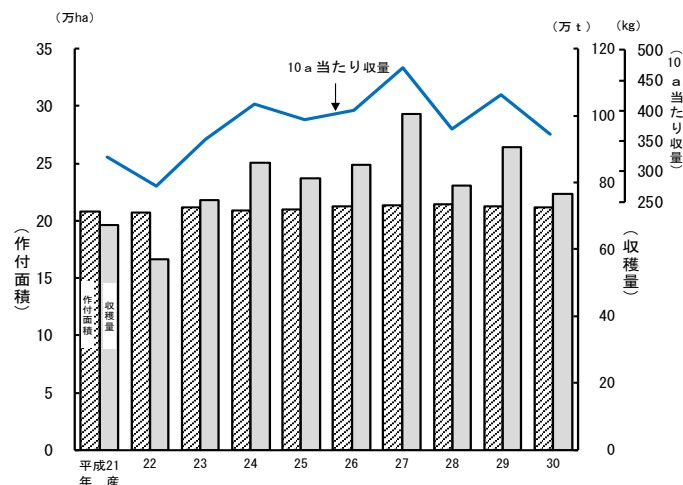


図 2-3 平成 30 年麦作期間の半旬別気象経過 (帯広)

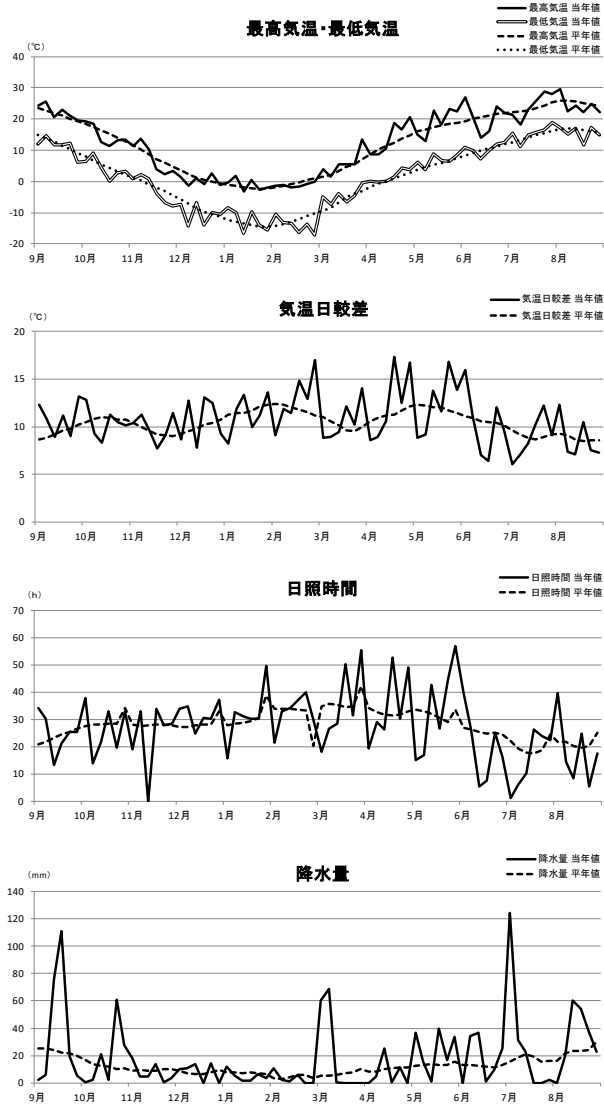
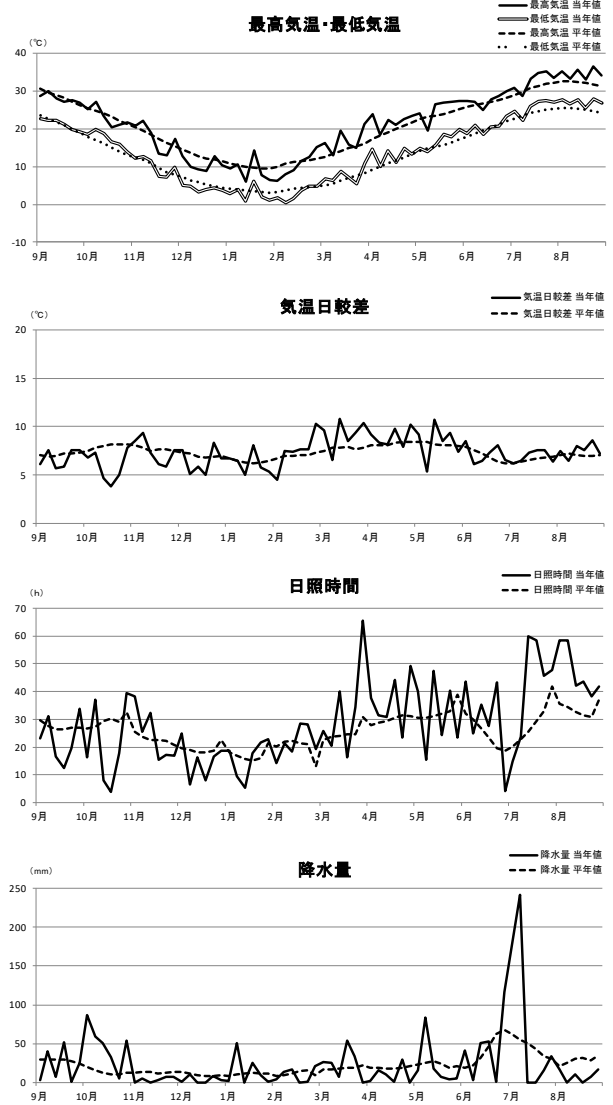


図 2-4 平成 30 年麦作期間の半旬別気象経過 (福岡)



イ 二条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

二条大麦の作付面積は3万8,300haで、前年産並みとなった。

このうち、北海道は1,660haで、前年産に比べ60ha（3%）減少した。

一方、都府県は3万6,600haで、前年産並みであった（表2-1、2-2、図2-5）。

(イ) 10aあたり収量

10aあたり収量は318kgで、前年産を2%上回った（表2-1、2-2、図2-5、2-6、2-7）。

(ウ) 収穫量

収穫量は12万1,700tで、前年産に比べ2,000t（2%）増加した（表2-1、2-2、図2-5）。

図2-5 二条大麦の作付面積及び収穫量及び10aあたり収量の推移（全国）

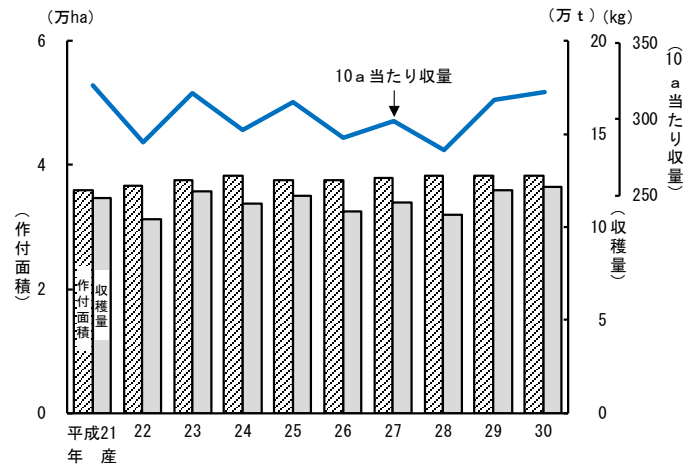


図2-6 平成30年麦作期間の半月別気象経過（栃木）

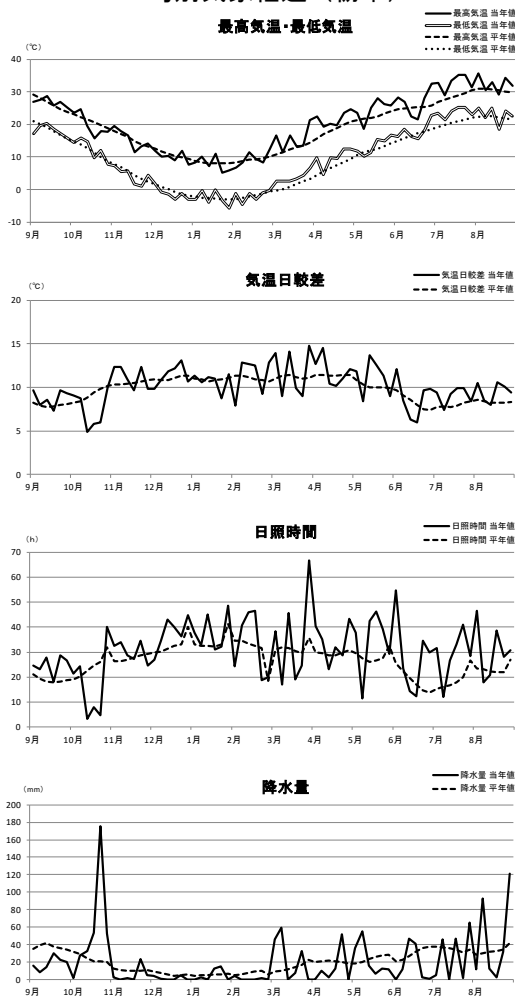
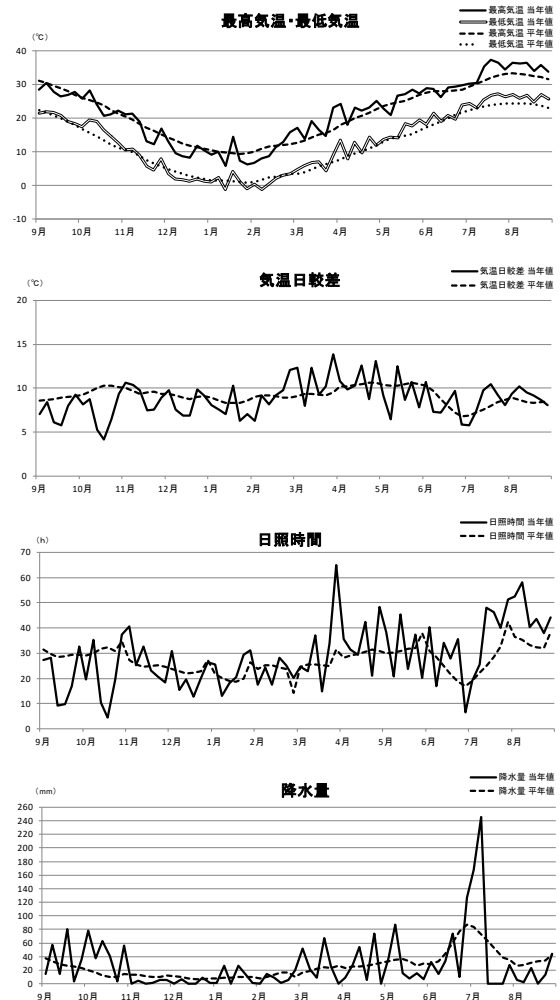


図2-7 平成30年麦作期間の半月別気象経過（佐賀）



ウ 六条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

六条大麦の作付面積は1万7,300haで、800ha（4%）減少した（表2-1、2-2、図2-8）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は225kgで、前年産を22%下回った。

これは、北陸地域において、大雪の影響で融雪時期が遅れたこと等により穂数が少なくなったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は79%となった（表2-1、2-2、図2-8、2-9、2-10）。

(ウ) 収穫量

収穫量は3万9,000tで、前年産に比べ1万3,400t（26%）減少した（表2-1、2-2、図2-8）。

図2-8 六条大麦の作付面積及び収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

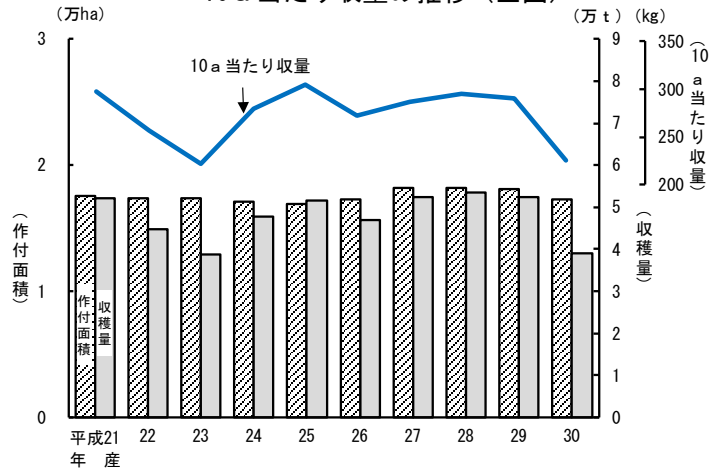


図2-9 平成30年麦作期間の半旬別気象経過（富山）

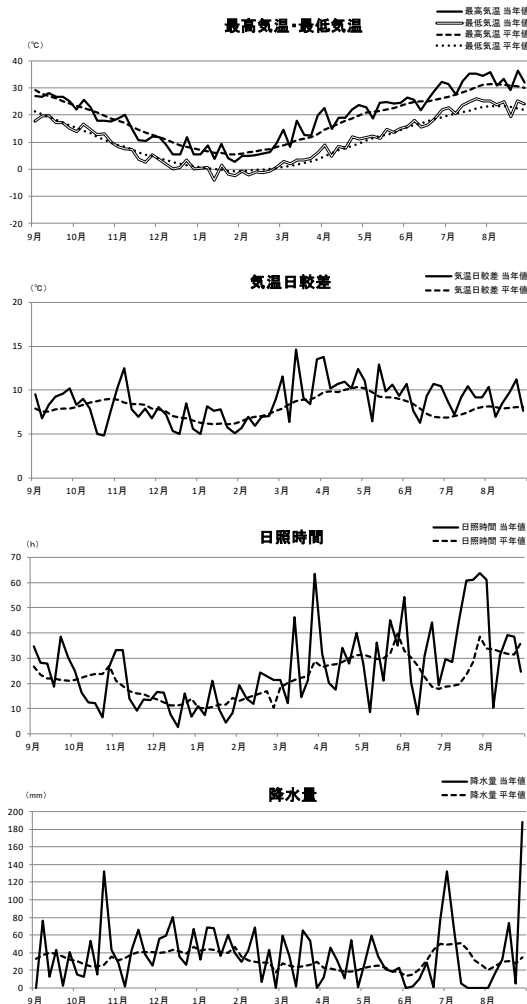
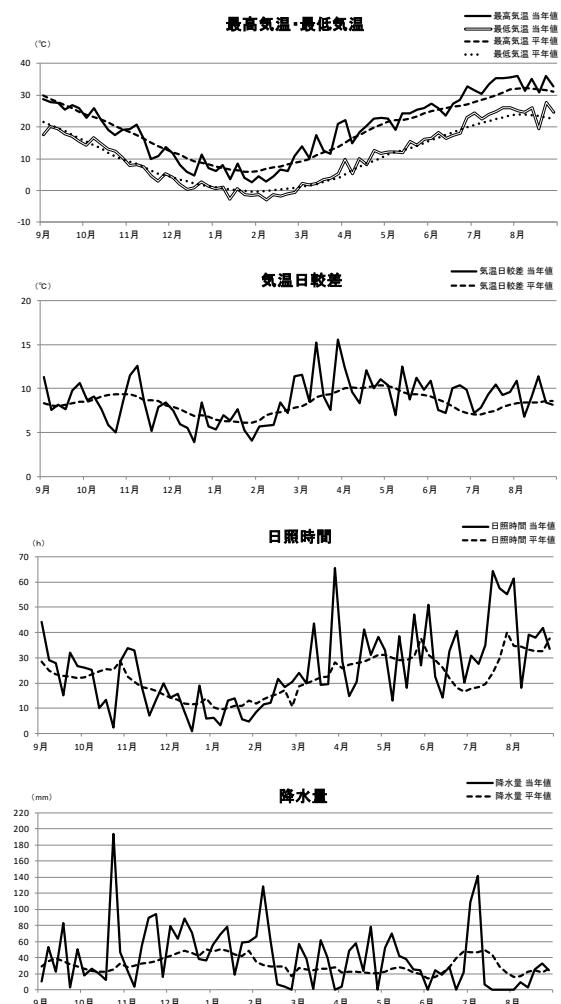


図2-10 平成30年麦作期間の半旬別気象経過（福井）



エ はだか麦（子実用）

(ア) 作付面積

はだか麦の作付面積は 5,420ha で、前年産に比べ 450ha（9%）増加した（表 2-1、2-2、図 2-11）。

(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は 258 kg で、前年産を 1% 上回った（表 2-1、2-2、図 2-11、2-12、2-13）。

(ウ) 収穫量

収穫量は 1万 4,000 t で、前年産に比べ 1,300 t（10%）増加した（表 2-1、2-2、図 2-11）。

図 2-11 はだか麦の作付面積及び収穫量及び 10a 当たり収量の推移（全国）

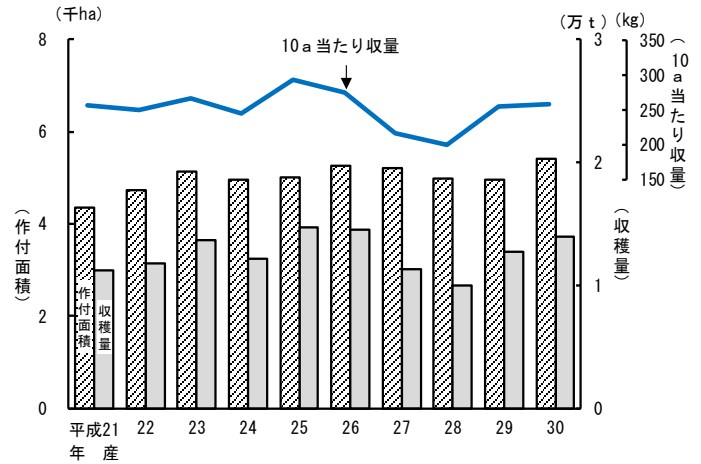


図 2-12 平成 30 年麦作期間の半旬別気象経過（愛媛）

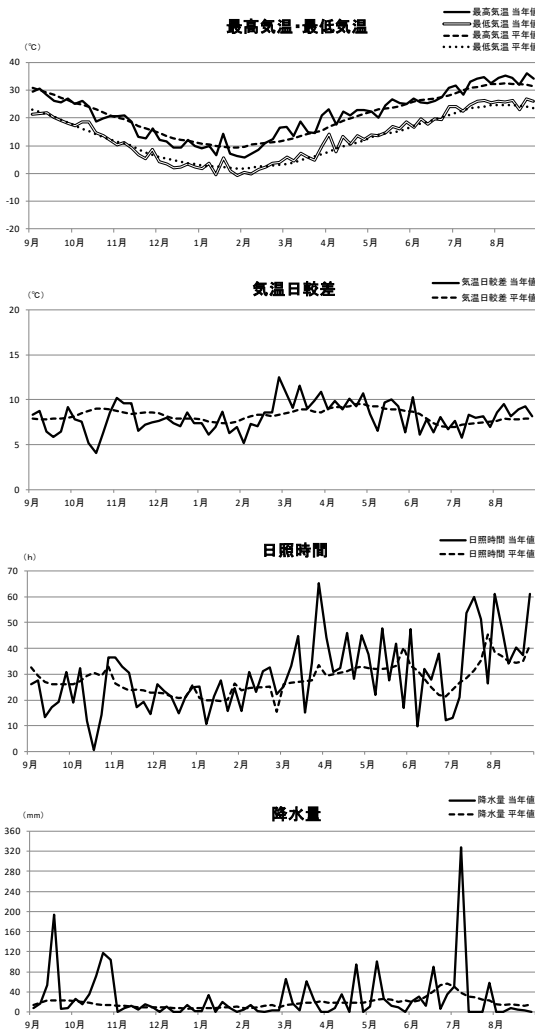
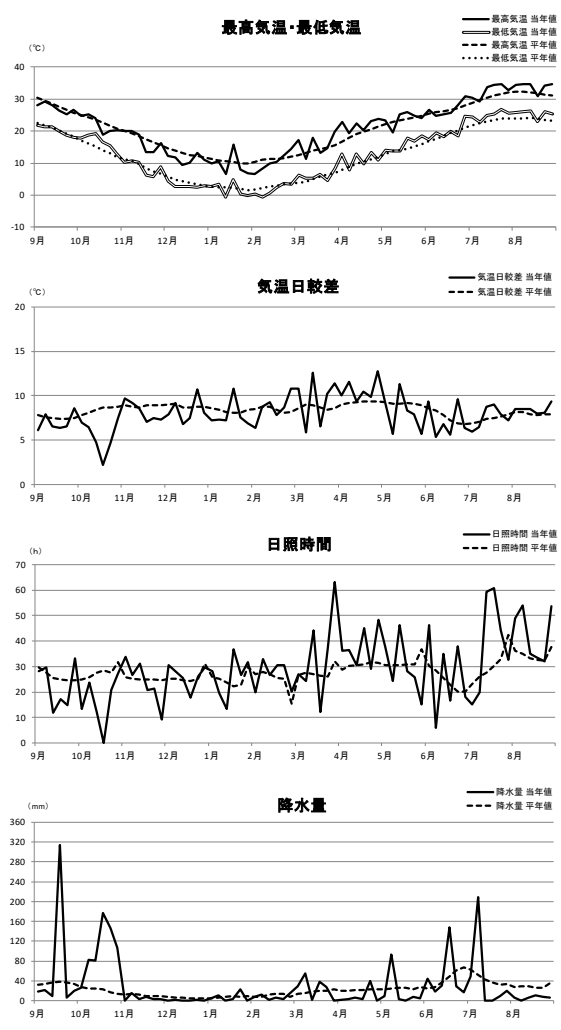


図 2-13 平成 30 年麦作期間の半旬別気象経過（大分）



3 豆類・そば

(1) 要 旨

平成 30 年産の豆類（乾燥子実）の収穫量は、大豆が 21 万 1,300 t、小豆が 4 万 2,100 t、いんげんは 9,760 t で、それぞれ前年産に比べ 4 万 1,700 t（16%）、1 万 1,300 t（21%）、7,140 t（42%）減少した。一方、らっかせいは 1 万 5,600 t で、前年産に比べ 200 t（1%）増加した。

また、そば（乾燥子実）の収穫量は 2 万 9,000 t で、前年産に比べ 5,400 t（16%）減少した（表 3）。

表 3 平成 30 年産豆類（乾燥子実）及びそば（乾燥子実）の作付面積、10a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10 a 当 たり 平均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平均 収 量
				対 差	対 比	対 比	対 比	対 差	対 比		
ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg		
大 豆	146,600	144	211,300	△ 3,600	98	86	△ 41,700	84	86	167	
小 豆	23,700	178	42,100	1,000	104	76	△ 11,300	79	81	219	
うち北海道	19,100	205	39,200	1,200	107	74	△ 10,600	79	80	255	
いんげん	7,350	133	9,760	200	103	56	△ 7,140	58	73	182	
うち北海道	6,790	136	9,230	160	102	55	△ 7,170	56	72	189	
らっかせい	6,370	245	15,600	△ 50	99	102	200	101	103	237	
うち千葉	5,080	256	13,000	0	100	106	800	107	106	241	
そ ば	63,900	45	29,000	1,000	102	82	△ 5,400	84	80	56	

注：小豆、いんげん及びらっかせいの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。平成30年産については全国の都道府県を対象に調査を行った。

(2) 解 説

ア 大豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

大豆の作付面積は 14 万 6,600ha で、前年産に比べ 3,600ha（2%）減少した（表 3、図 3-1）。

(イ) 10a 当たり収量

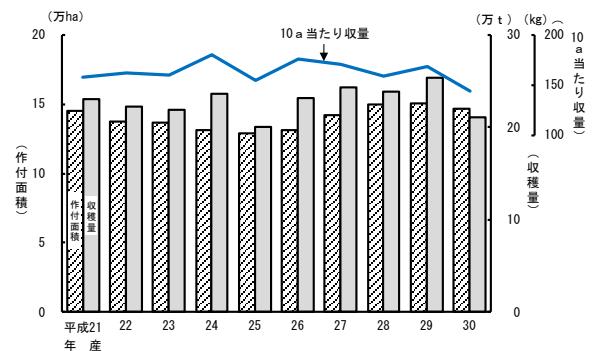
10a 当たり収量は 144kg で、前年産を 14% 下回った。

これは、北海道においては低温、日照不足及び多雨の影響による着さや数の減少、北陸や東海等においては台風の影響等による湿害及び倒伏が発生したためである（表 3、図 3-1）。

(ウ) 収穫量

収穫量は 21 万 1,300 t で、前年産に比べ 4 万 1,700 t（16%）減少した（表 3、図 3-1）。

図 3-1 大豆の作付面積、収穫量及び 10a 当たり収量の推移（全国）



イ 小豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

小豆の作付面積は2万3,700haで、前年産に比べ1,000ha（4％）増加した。

このうち、主産地である北海道の作付面積は1万9,100haで、大豆等からの転換により、前年産に比べ1,200ha（7％）増加した。（表3、図3-2）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は178kgで、前年産を24％下回った。

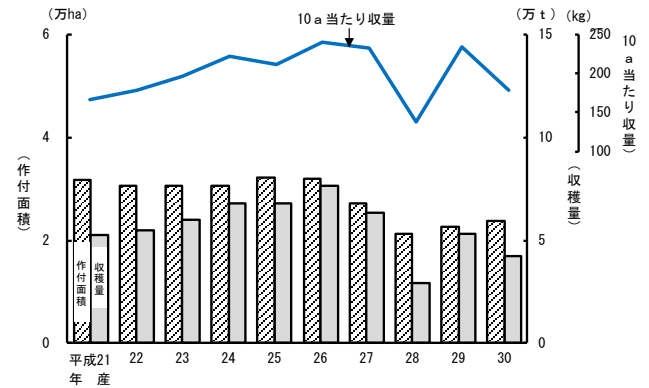
これは、主産地である北海道において、低温、日照不足及び多雨の景況により、着さや数及び粒数が少なくなったためである。（表3、図3-2）。

(ウ) 収穫量

収穫量は4万2,100tで、前年産に比べ1万1,300t（21％）減少した。

なお、都道府県別の収穫量割合は、北海道が全国の93％を占めている（表3、図3-2）。

図3-2 小豆の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



ウ いんげん（乾燥子実）

(ア) 作付面積

いんげんの作付面積は7,350haで、前年産に比べ200ha（3％）増加した。

このうち、北海道の作付面積は6,790haで、大豆等からの転換により、前年産に比べ160ha（2％）増加した。（表3、図3-3）。

(イ) 10a当たり収量

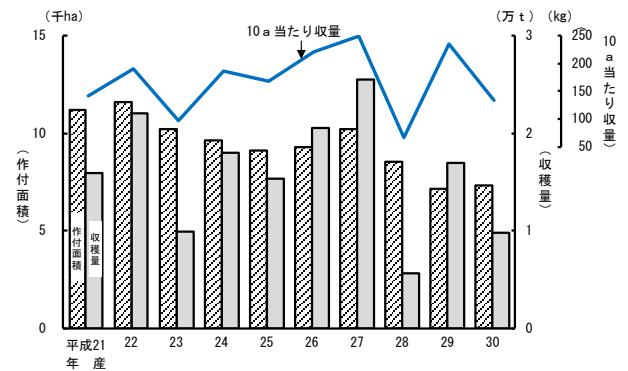
10a当たり収量は133kgで、前年産を44％下回った。

これは、低温、日照不足及び多雨の影響により、着さや数及び粒数が少なくなったためである（表3、図3-3）。

(ウ) 収穫量

収穫量は9,760tで、前年産に比べ7,140t（42％）減少した（表3、図3-3）。

図3-3 いんげんの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



エ らっかせい（乾燥子実）

(ア) 作付面積

らっかせいの作付面積は6,370haで、前年産に比べ50ha（1%）減少した。

このうち、千葉県で作付面積は5,080haで、前年産並みとなった（表3、図3-4）。

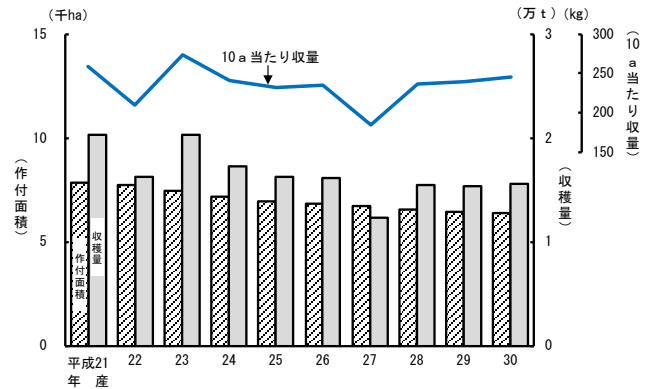
(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は245kgで、前年産を2%上回った。（表3、図3-4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は1万5,600tで、前年産に比べ200t（1%）増加した。

図3-4 らっかせいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



オ そば（乾燥子実）

(ア) 作付面積

そばの作付面積は6万3,900haで、前年産に比べ1,000ha（2%）増加した。

これは、他作物からの転換等があったためである（表3、図3-5）。

(イ) 10a当たり収量

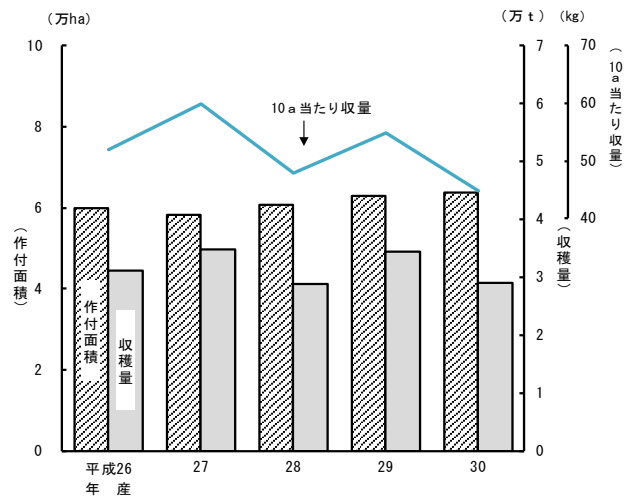
10a当たり収量は45kgで、前年産を18%下回った。

これは、主産地である北海道において、日照不足・多雨による湿害等の発生及び台風による脱粒があったためである（表3、図3-5）。

(ウ) 収穫量

収穫量は2万9,000tで、前年産に比べ5,400t（16%）減少した（表3、図3-5）。

図3-5 そばの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



4 かんしょ

(1) 作付面積

かんしょの作付面積は3万5,700haで、前年産並みであった(表4、図4)。

(2) 10a当たり収量

10a当たり収量は2,230kgで、前年産を2%下回った(表4、図4)。

(3) 収穫量

収穫量は79万6,500tで、前年産に比べ1万600t(1%)減少した(表4、図4)。

図4 かんしょの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移(全国)

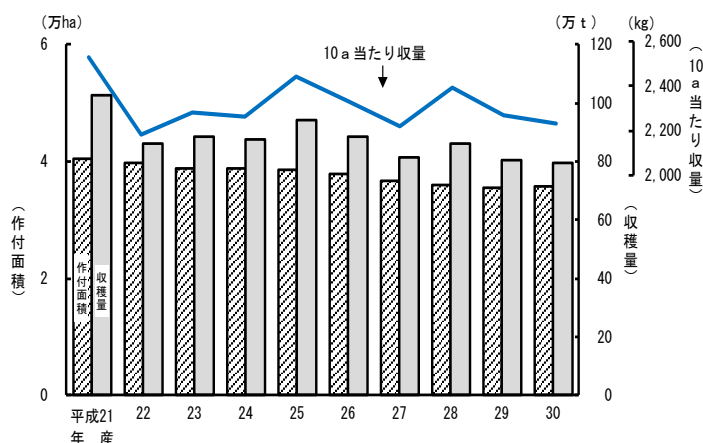


表4 平成30年産かんしょの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10a 当たり 収量	収穫量		10a 当たり 平均収量 対	10a 当たり 平均収量	
				対差	対比	対比	対差	対比	%	kg	
全 国	ha 35,700	kg 2,230	t 796,500	ha 100	% 100	% 98	t △ 10,600	% 99	% 97	kg 2,310	
うち 茨城	6,780	2,560	173,600	80	101	98	△ 1,300	99	98	2,600	
千葉	4,090	2,440	99,800	△ 40	99	100	△ 1,400	99	98	2,490	
静岡	540	1,830	9,880	△ 42	93	101	△ 620	94	109	1,680	
徳島	1,090	2,570	28,000	△ 10	99	93	△ 2,300	92	106	2,420	
熊本	971	2,270	22,000	△ 29	97	102	△ 300	99	101	2,240	
宮崎	3,610	2,500	90,300	△ 80	98	102	300	100	100	2,510	
鹿児島	12,100	2,300	278,300	200	102	97	△ 3,700	99	92	2,490	

注：かんしょの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。平成30年産については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県の調査結果から推計したものである。

5 飼料作物

(1) 牧草

ア 作付（栽培）面積

牧草の作付(栽培)面積は72万6,000haで、前年産並みとなった(表5-1、図5-1)。

イ 10a当たり収量

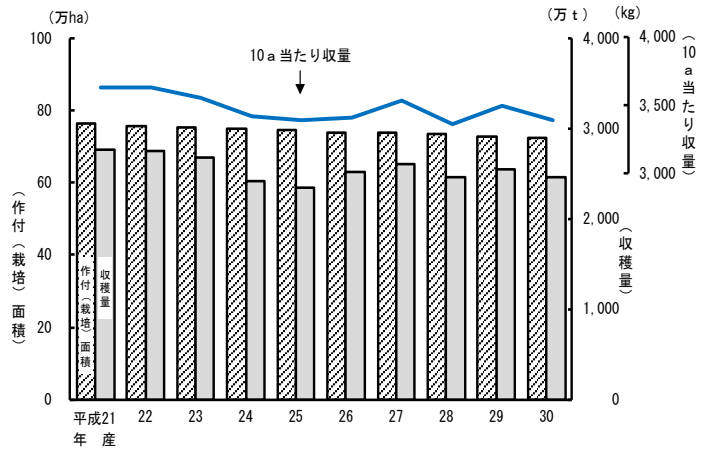
10a当たり収量は3,390kgで、前年産を3%下回った。

これは、主産地である北海道において、低温、日照不足及び多雨により、生育が抑制されたためである(表5-1、図5-1)。

ウ 収穫量

収穫量は2,462万1,000tで、前年産に比べ87万6,000t(3%)減少した(表5-1、図5-1)。

図5-1 牧草の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移(全国)



注：平成24年産及び平成25年産の10a当たり収量及び収穫量については、全国値の推計を行っていないため、主産県計の数値である。

表5-1 平成30年産牧草の作付(栽培)面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付(栽培)面積	10a当たり収量	収穫量	前年産との比較					(参考)		
				作付(栽培)面積		10a当たり収量		収穫量		10a当たり平均収量対	10a当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
全国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
	726,000	3,390	24,621,000	△ 2,300	100	97	△ 876,000	97	97	3,480	
うち北海道	533,600	3,240	17,289,000	△ 1,400	100	97	△ 580,000	97	99	3,270	

注：飼料作物の作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。平成30年調査については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) 青刈りとうもろこし

ア 作付面積

青刈りとうもろこしの作付面積は9万4,600haで、前年産並みとなった(表5-2、図5-2)。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は4,740kgで、前年産を6%下回った。

これは、主産地である北海道において、日照不足及び多雨により、生育が抑制されたためである(表5-2、図5-2)。

ウ 収穫量

収穫量は448万8,000tで、前年産に比べ29万4,000t(6%)減少した(表5-2、図5-2)。

図5-2 青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移(全国)

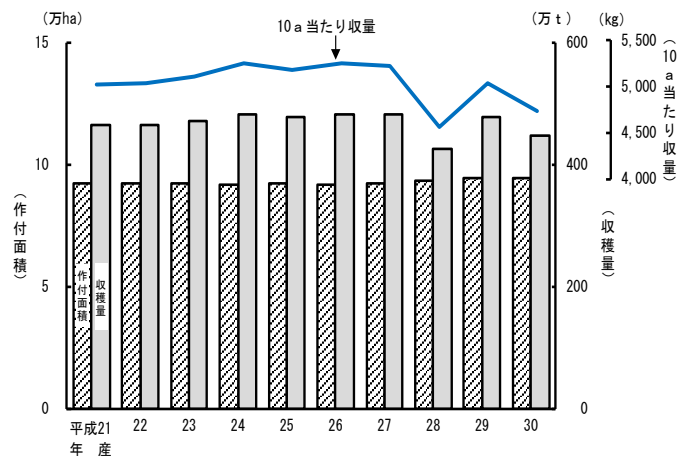


表5-2 平成30年産青刈りとうもろこしの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10a 当たり 収量		収穫量		10a 当たり 平均収量 対	10a 当たり 平均収量
				対差	対比	対比	対比	対差	対比		
全 国	ha 94,600	kg 4,740	t 4,488,000	ha △ 200	% 100	% 94	t △ 294,000	% 94	% 92	kg 5,160	
うち北海道	55,500	4,860	2,697,000	400	101	89	△ 306,000	90	88	5,500	

注： 飼料作物の作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。平成30年調査については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県の調査結果から推計したものである。

(3) ソルゴー

ア 作付面積

ソルゴーの作付面積は1万4,000haで、前年産に比べ400ha（3%）減少した。

これは、他作物への転換等があったためである（表5-3、図5-3）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は4,410kgで、前年産を5%下回った。

これは、主産地である九州において、台風による倒伏等の被害が発生したためである。（表5-3、図5-3）。

ウ 収穫量

収穫量は61万8,000tで、前年産に比べ4万7,000t（7%）減少した（表5-3、図5-3）。

図5-3 ソルゴーの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

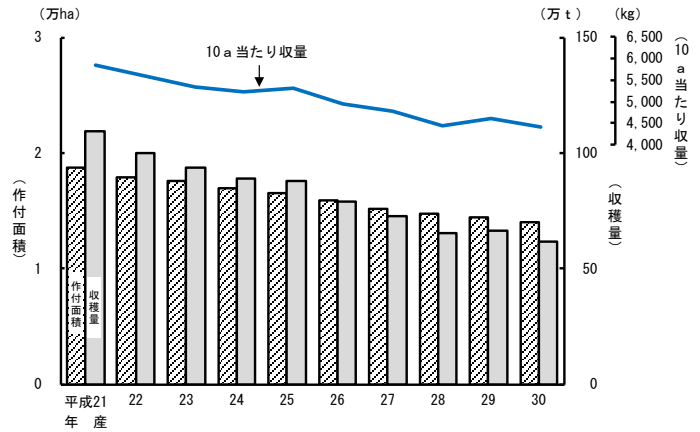


表5-3 平成30年産ソルゴーの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較					(参 考)		
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10 a 当 たり 平均 収 量 対	10 a 当 たり 平均 収 量
				対 差	対 比	対 比	対 比	対 差	対 比		
全 国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
	14,000	4,410	618,000	△ 400	97	95	△ 47,000	93	88	4,990	

注： 飼料作物の作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。平成30年調査については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県の調査結果から推計したものである。

6 工芸農作物

(1) 茶

ア 栽培面積

全国の茶の栽培面積は4万1,500haで、前年に比べ900ha（2％）減少した（表6-1）。

イ 摘採実面積

主産県の摘採実面積は3万3,300haで、前年産に比べ500ha（1％）減少した（表6-2）。

ウ 生葉収穫量

主産県の生葉収穫量は38万3,600tで、前年産に比べ2万900t（6％）増加した。

これは、主産地である静岡県、鹿児島県においておおむね天候に恵まれ生育が順調であったためである（表6-2）。

エ 荒茶生産量

主産県の荒茶生産量は8万1,500tで、前年産に比べ4,400t（6％）増加した。

都府県別にみると、静岡県が3万3,400t（主産県計に占める割合は41％）、次いで鹿児島県が2万8,100t（同34％）、三重県が6,240t（同8％）、宮崎県が3,800t（同5％）となっている（表6-2、図6-1）。

表6-1 茶の栽培面積（全国）

単位：ha	
区 分	栽 培 面 積
平成29年	42,400
30	41,500
対前年産比（％）	98

注：平成29年から茶の栽培面積は、主産県調査であり、全国値は主産県の調査結果から推計したものである。

図6-1 荒茶生産量割合（主産県）

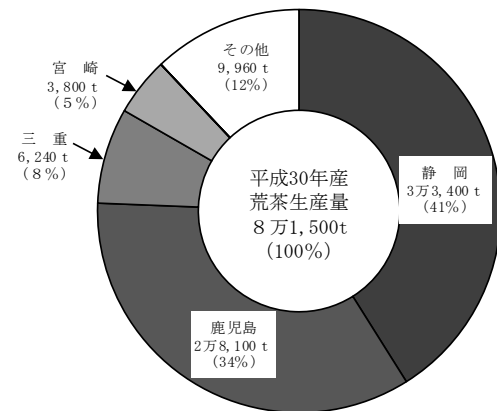


表6-2 平成30年産茶の摘採面積、10a当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

区 分	摘 採 面 積		10 a 当 たり 生 葉 収 量		生 葉 収 穫 量		荒 茶 生 産 量	
	実 面 積	延 べ 面 積	一 番 茶	一 番 茶	一 番 茶	一 番 茶	一 番 茶	
	ha	ha	kg	kg	t	t	t	t
平成29年産	33,800	82,100	1,070	412	362,700	139,400	77,100	27,900
30	33,300	81,700	1,150	461	383,600	153,100	81,500	30,500
対前年産比（％）	99	100	107	112	106	110	106	109

注：1 茶の収穫量調査は主産県調査であり、6年周期で全国調査を実施している。平成30年産については主産県を対象に調査を行った。

2 平成30年産から主産県の対象が12府県から11府県に変更となったことから、平成29年産の数値は、平成30年産と比較するため、平成30年産における主産県（11府県）を対象に集計したものである。

(2) なたね（子実用）

ア 作付面積

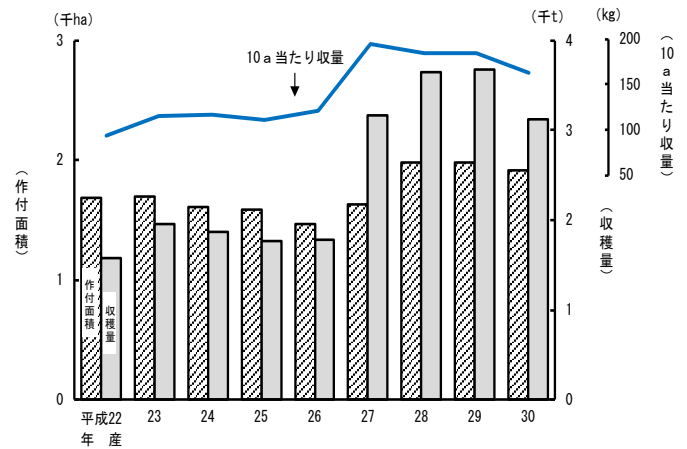
なたねの作付面積は1,920haで、前年産に比べ60ha（3%）減少した（表6-3、図6-2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は163kgで、作柄の良かった前年産を12%下回った。

これは、主産地である北海道において、6月上旬まではおおむね天候に恵まれたものの、その後の日照不足等の影響により、作柄の良かった前年産を下回ったことに加え、東北地方において、多雨により発芽不良となったためである（表6-3、図6-2）。

図6-2 なたねの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



ウ 収穫量

収穫量は3,120 tで、前年産に比べ550 t（15%）減少した（表6-3、図6-2）。

表6-3 平成30年産なたねの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収	収 穫 量		10 a 当 たり 平均収量 対 比	10 a 当 たり 平均収量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg		
全 国	1,920	163	3,120	△ 60	97	88	△ 550	85	113	144	

(3) てんさい（北海道）

ア 作付面積

北海道のてんさいの作付面積は5万7,300haで、前年産に比べ900ha（2%）減少した。

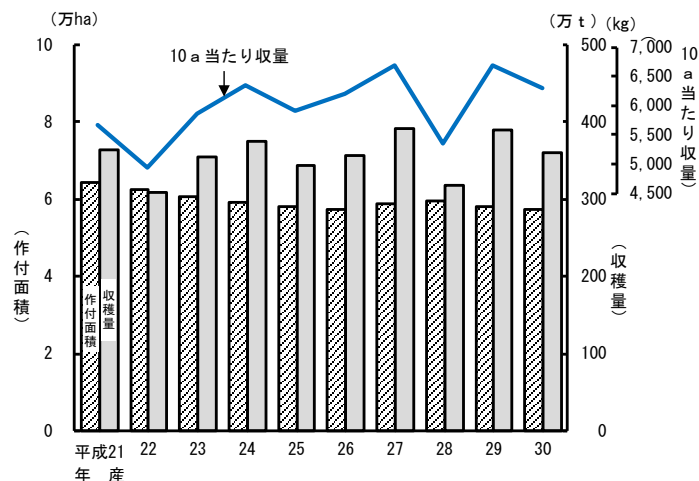
これは、労働力不足による作付中止や他作物への転換等があったためである（表6-4、図6-3）。

イ 10a当たり収量

北海道の10a当たり収量は6,300kgで、作柄の良かった前年産を6%下回った。

これは、6月上旬まではおおむね天候に恵まれたものの、その後の日照不足等の影響により、作柄の良かった前年産を下回ったためである（表6-4、図6-3）。

図6-3 てんさいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（北海道）



ウ 収穫量

北海道の収穫量は361万1,000tで、前年産に比べ29万t（7%）減少した（表6-4、図6-3）。

表6-4 平成30年産てんさいの作付面積、10a当たり収量及び収穫量（北海道）

区分	作付面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収	収 穫 量		10 a 当 たり 平 均 収 量 対	10 a 当 たり 平 均 収 量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
北海道	ha 57,300	kg 6,300	t 3,611,000	ha △ 900	% 98	% 94	t △ 290,000	% 93	% 102	kg 6,200	

注：てんさいの調査は、北海道を対象に行っている。

(4) さとうきび

ア 収穫面積

さとうきびの収穫面積は2万2,600haで、前年産に比べ1,100ha（5%）減少した。

これは、他作物への転換があったためである（表6-5、図6-4）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は5,290kgで、前年産を3%下回った。

これは、鹿児島県において、相次ぐ台風の通過により茎葉の損傷や倒伏被害等が発生したためである（表6-5、図6-4）。

ウ 収穫量

収穫量は119万6,000tで、前年産に比べ10万1,000t（8%）減少した（表6-5、図6-4）。

図6-4 さとうきびの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移

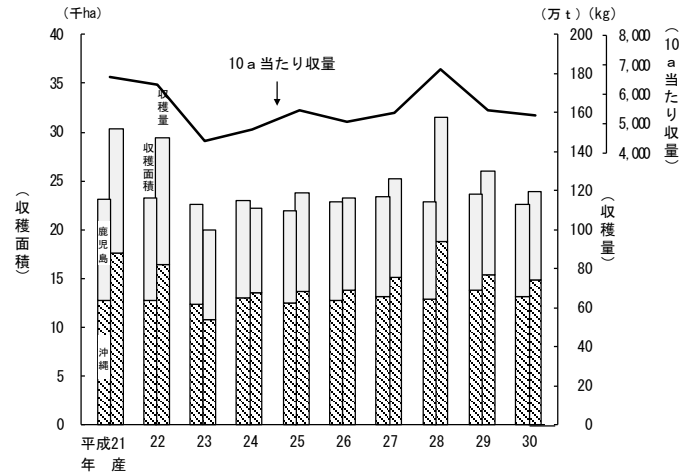


表6-5 平成30年産さとうきびの作型別栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積	収 穫 面 積				10 a 当 た り 収 量			
		計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し	計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し
	ha	ha	ha	ha	ha	kg	kg	kg	kg
全 国 平成29年産	28,500	23,700	5,130	2,880	15,700	5,470	7,120	5,030	5,010
30	27,700	22,600	4,040	3,260	15,300	5,290	7,050	4,880	4,910
対前年産比(%)	97	95	79	113	97	97	99	97	98
鹿 児 島	10,900	9,450	915	1,730	6,800	4,790	6,290	4,850	4,580
対前年産比(%)	98	96	82	104	96	90	87	94	90
沖 縄	16,800	13,100	3,120	1,530	8,500	5,670	7,280	4,920	5,180
対前年産比(%)	97	95	78	125	99	102	103	101	105

区分	収 穫 量			
	計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し
	t	t	t	t
全 国 平成29年産	1,297,000	365,200	144,900	787,200
30	1,196,000	284,700	159,100	751,900
対前年産比(%)	92	78	110	96
鹿 児 島	452,900	57,600	83,900	311,400
対前年産比(%)	86	72	98	86
沖 縄	742,800	227,100	75,200	440,500
対前年産比(%)	97	80	127	104

注： さとうきびの調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に行っている。

(5) こんにゃくいも（全国）

ア 栽培面積・収穫面積

全国のこんにゃくいもの栽培面積は3,700ha で前年産に比べ160ha（4％）減少した。

これは、労働力不足による作付け中止があったためである。（表6-6、図6-5）。

また、全国の収穫面積は2,160ha で、前年産に比べ170ha（7％）減少した。

これは、群馬県において養成期間の長い品種への切替えが進んだためである。

イ 10a当たり収量

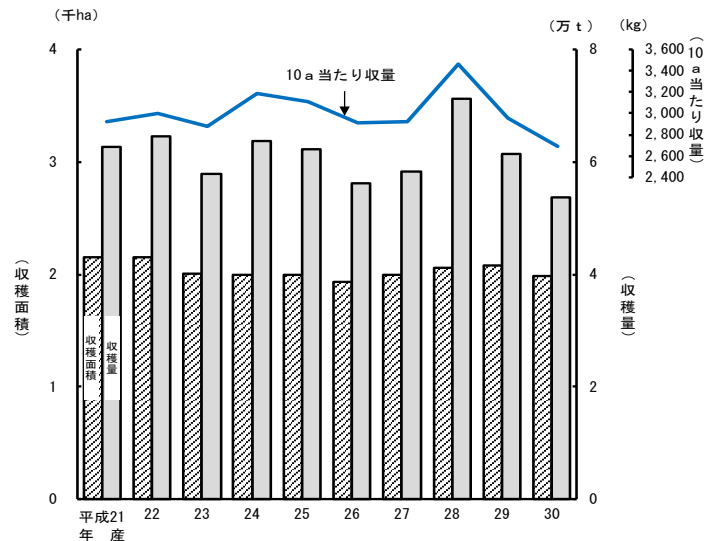
全国の10a当たり収量は2,590kg で、前年産を7％下回った。

これは、7月の高温・乾燥及び9月の台風の影響により、いもが肥大不良となったためである（表6-6、図6-5）。

ウ 収穫量

全国の収穫量は5万5,900t で、前年産に比べ8,800t（14％）減少した（表6-6、図6-5）。

図6-5 こんにゃくいもの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（主産県）



注：こんにゃくいもの全国値が全て揃わないため、主産県計で作成している。

表6-6 平成30年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積	収穫面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 対 比								(参 考)	
					栽 培 面 積		収 穫 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10 a 当 たり 平均収量 対 比	10 a 当 たり 平均収量
					対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比		
全 国	ha	ha	kg	t	ha	%	ha	%	%	%	t	%	%	kg
	3,700	2,160	2,590	55,900	△ 160	96	△ 170	93	93	△ 8,800	86	91	2,840	
う ち 栃 木	89	62	2,400	1,490	△ 6	94	△ 5	93	89	△ 330	82	93	2,570	
群 馬	3,280	1,930	2,700	52,100	△ 70	98	△ 80	96	91	△ 7,600	87	89	3,040	

注：こんにゃくいもの作付面積及び収穫量調査は主産県調査であり、3年又は6年周期で全国調査を実施している。平成30年調査については、全国を対象に調査を行っている。

(6) い (主産県)

ア 作付面積

主産県（福岡県及び熊本県。以下同じ。）における「い」の作付面積は 541ha で、前年産に比べ 37ha（6％）減少した。

これは、他作物への転換等があったためである（表 6－7、図 6－6）。

イ 10a 当たり収量

主産県の 10a 当たり収量は 1,390 kg で、作柄の良かった前年産を 6％下回った。

これは、5月下旬以降の高温・少雨により、茎伸長が抑制されたためである（表 6－7、図 6－6）。

ウ 収穫量

主産県の収穫量は 7,500 t で、前年産に比べ 1,030 t（12％）減少した（表 6－7、図 6－6）。

エ 畳表生産農家数及び畳表生産量

主産県の「い」の生産農家数は 450 戸で、前年産に比べ 24 戸（5％）減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は 449 戸で、前年に比べ 7 戸（2％）減少した。

なお、平成 29 年 7 月から平成 30 年 6 月までの畳表生産量は 2,610 千枚で、前年に比べ 40 千枚（2％）減少した（表 6－7）。

図 6－6 「い」の収穫面積、収穫量及び 10a 当たり収量の推移（主産県）

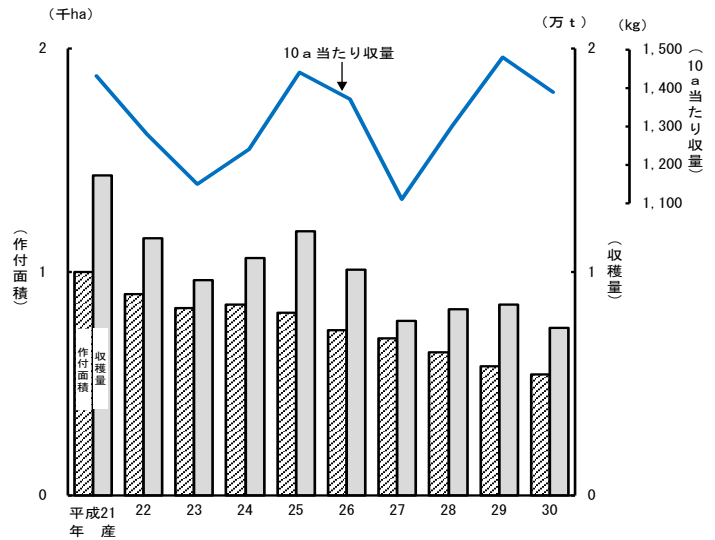


表 6－7 平成 30 年産「い」の作付面積、10a 当たり収量、収穫量等（主産県）

区分	「い」 生産 農家数	作付面積 ha	10 a 当たり 収量 kg	収穫量 t	前年産との比較					(参考)		畳表生産 農家数	畳表 生産量 千枚
					作付面積		10 a 当たり 収量	収穫量		10a 当たり 平均収量 対比	10a 当たり 平均収量		
					対差	対比	対比	対差	対比	%	kg		
主産県計	450	541	1,390	7,500	△ 37	94	94	△1,030	88	107	1,300	449	2,610
福岡	8	7	1,190	83	△ 3	70	97	△ 40	67	97	1,230	9	29
熊本	442	534	1,390	7,420	△ 34	94	94	△ 990	88	107	1,300	440	2,580

注：1 「い」の調査は、福岡県及び熊本県を対象に行っている。

2 「い」生産農家数は、平成 30 年産の「い」の生産を行った農家の数である。

3 畳表生産農家数は、「い」の生産から畳表の生産まで一貫して行っている農家であって、平成 29 年 7 月から平成 30 年 6 月までに畳表の生産を行った農家の数である。

4 畳表生産量は、畳表生産農家によって平成 29 年 7 月から平成 30 年 6 月までに生産されたものである。

5 主産県計の 10a 当たり平均収量は、各県の 10a 当たり平均収量に平成 30 年産の作付面積を乗じて求めた平均収穫量を積み上げ、平成 30 年産の主産県計作付面積で除して算出している。